

「畸形」を仮装する ——田村俊子「春の晩」における女性同性愛表象

趙書心

1. はじめに

日本近代文学における女性同性愛の問題を考えるとときに、田村俊子の重要性はこれまでも指摘されてきた。従来両性相剋といった異性愛的主題を表現した作家として読まれてきた俊子は、近年シスターフッドやレズビアニズムを描く女性作家のひとりとして評価されてきた¹。なかでも、俊子の女性同性愛表象を絞った論考の多くは、彼女の出世作『あきらめ』を取り上げ、そこにおける非異性愛的な攪乱性や「レズビアン連続体」を読み取っている²。他方、『あきらめ』のほかにも、レズビアニズムを表現した俊子の作品は少なからずあるが、正面から考察した作品論は管見の限りまだ少ない。本稿は、それらの作品の一つ——『あきらめ』の女性同性愛表象より明示的に、女性同士のエロティシズムが語られる作品——「春の晩」を考察対象にしたい。

「春の晩」は1914(大正3)年6月号の『新潮』に発表された短編小説である。1914年にあたる大正期前半は、女性同士の心中事件によって、女性同性愛が「発見」され、それに関する近代的な知が一般に広まりつつあった時期である³。またこの時代は、性欲学著作の大量の翻訳出版により、セクソロジーの通俗化がピークを迎えようとしていた時期でもあった⁴。こうした時代に出された同作も、セクソロジーの時代の影響を免れられず、同時代の評論家に「女の性欲倒錯を描いたもの」として名指された⁵ほどの問題作となっている。

「春の晩」の物語内容になっている出来事は、男性の恋人のいる主人公が一人の女友達に好意を覚え、親密な行為に及ぶという事態である。物語は主人公幾重と男性の恋人繁雄との会食から始まる。それまで恋しかった繁雄という恋人に対し、幾重がこの夜に倦怠感を覚えはじめ、彼と会話をあまり交わさないまま、その場を去ってしまう。繁雄と別れた幾重が女友達の京子を訪ね、二人が京子の家で逢う場面へと展開する。この場面では、二人の交わした行動は抱きしめあったという程度のことだが、そのとき幾重が覚えた感情は「愛の絶頂」⁶と形容され、女性同士間の濃密な思慕が描かれている。

以上のように要約可能な「春の晩」についての研究は、最初に主人公のバイセクシュアリティに着目する形でなされてきた。もっともはやく本作を論じた吉川豊子は、「幾重というバイセクシュアルの女性が描かれ」としていると指摘し、幾重が「異性愛によって満たされないセクシュアリティ」を京子との同性の「遊戯」によって満たしてゆくと言っている⁷。また、村瀬士朗は吉川の見解を引き継ぎ、バイセクシュアリティが表象されながらも、異性愛規範が内在すると本

1

例えば、菅聡子は吉屋信子と並び、シスターフッドの可能性を探ってきた作家の一人として俊子を取り上げ、長谷川啓は俊子作品における同性愛主題を異性愛絶対主義への抵抗として高く評価している。(菅聡子「女性同士の絆：近代日本の女性同性愛」『国文』106、24-39、2006年12月；長谷川啓「田村俊子と同性愛」、新フェミニズム批評の会編『大正女性文学論』翰林書房、67-83、2010年12月)

2

そうした論考としては、平石典子「『新しい女』からの発信：『あきらめ』再読」『人文論叢』17、21-35、2000年3月；小平麻衣子「再演する〈女〉：田村俊子『あきらめ』のジェンダー・パフォーマンス」『国語と国文学』77(5)、58-69、2000年5月；浅野正道「やがて終わるべき同性愛と田村俊子：『あきらめ』を中心に」『日本近代文学』65、163-178、2001年10月などが挙げられる。

3

肥留間由紀子「近代日本における女性同性愛の『発見』」『解放社会学研究』17、9-32、2003年

4

例としては、1913(大正2)年に、澤田順三郎は『性欲論講和』を世に出し、クラフト・エビング『変態性欲心理』が翻訳出版され、小倉清三郎は日本初の性の研究会「相対会」を発足し、『相対会第一組合小倉清三郎研究報告』第一集を刊行したなどが挙げられる。

5

山田横櫛「六月の文藝」『帝国文学』1914年7月

6

田村俊子「春の晩」、黒澤亜里子、長谷川啓監修『田村俊子全集第四巻』ゆまに書房、489頁、2012年11月。以下テキストからの引用は、ルビを省略し、漢字の旧字体を新字体に変え、頁数を括弧のなかに記す。

7

吉川豊子「近代日本の「レズビアニズム」：一九一〇年代の小説に描かれたレズビアンたち」、近藤和子編『性幻想を語る』三一書房、75-110、1998年3月

作の位相を分析している⁸。村瀬によれば、異性愛関係が「幾重のセクシュアリティの起源として特権化され」ているゆえに、「男性中心的な恋愛関係の権力構造を補完する側面を持っている」という⁹。一方、バイセクシュアリティとは異なり、作品の女性同性愛表象に焦点化する形で、本作を再評価する論も発表された。長谷川啓は本作を俊子の女性同性愛作品の代表的なひとつとして位置づけ、俊子が「大胆に」描いた「同性愛主題」を、近代社会の「異性愛絶対主義」に「一石を投じる」ような「前近代的な性愛」、すなわち異性愛の否定形として高く評価している¹⁰。

以上の通り、先行研究は主人公のセクシュアリティに注目し、作中の異性愛・女性同性愛表象を考察している。なかでも、長谷川論は女性同性愛表象の意義を積極的に再検討する点で、それまでの先行研究とは一線を画している。しかし、フェミニズムの見地から、同性愛表象を異性愛社会からの〈解放区〉とみとる長谷川の視座は果たして有効的なのか。先述したように、大正初期にはすでにセクシュアリティ、とくに女性同性愛をめぐる様々な言説や監視の戦略が組み込まれている。こうした権力構造を越境し、「前近代的な性愛」¹¹の〈ユートピア〉を描きだすのはさほど容易ではないといえるだろう。したがって、ここで遂行しなければならないのは、レズビアニズムの礼賛ではなく、それがいかに周囲の権力構造と交渉していたのかを問うことではなかろうか。そのために、本稿は先行研究で看過されてきた、女性同性愛をめぐる同時代の言説空間に留意しつつ、本作の女性同性愛表象を読み直す。

さらに、前掲したあらすじからわかるように、本作に描かれている恋愛は女性同性愛に限定されておらず、テキストの半分は主人公幾重と繁雄との異性愛の恋愛問題に割かれている。女性から女性への欲望だけを表象した俊子の『あきらめ』などとは異なり、本作は主人公の欲望が男性にも向ける点に特徴を示している。したがって、女性同性愛表象を問う前に、本作の異性愛に対する意味づけをも考察する必要があり、吉川・村瀬が提起したバイセクシュアリティ表象の問題も看過できない。しかし、二氏の考察には問題がないとはいえない。なかでも、「異性愛が特権化され」、「男性中心的な恋愛関係の権力構造を補完する」という、本作の位相に対する村瀬の見解¹²は再検討する余地がある。というのは、テキストに散見される主人公の身体感覚についての描写に注目を払えば、そこから読み取り得る情動と欲望は、必ずしも異性愛の権力構造を補完するわけではない。村瀬は主人公のセクシュアリティを読む際に、物語内の出来事のみに注目し、こうした感覚描写をほとんど見過ごしたようである。そこで、本稿は感覚描写に隠された欲望のあり様を読みこみ、異性愛制度に対する本作の位相を批判的に再考する。

以上を踏まえて本稿では、田村俊子の「春の晩」に現れる感覚の描写と、女性同性愛をめぐる当時の言説空間という二点に注目し、本作におけるセクシュアリティ表象を分析したい。まず「春の晩」に頻出する特徴的な感覚描写を手掛かりにし、異性愛制度に対する本作の位相を再検討してみたい。それから女性

8

村瀬士朗「バイセクシュアル：田村俊子『春の晩』『國文學：解釈と教材の研究』46(3)、206-208、2001年2月

9

同上

10

長谷川啓「田村俊子と同性愛」、新フェミニズム批評の会編『大正女性文学論』翰林書房、67-83、2010年12月

11

同上

12

同注8

同性愛表象に絞り、セクソロジーの知が広まりつつあった時代に、作者が女性同性愛を描く際、どのような視線といかに交渉していたのかを念頭に置き、女性同性愛の表象を同時代言説との関わりから読み直してみる。このような検討を通して、本作の同時代的意義を照らし出すことを目的としたい。

2. 読み落とされた幾重の感覚世界

ある雨の降る春の夜の出来事を描いた「春の晩」では、異性愛と同性愛という二つの恋愛場面が描かれ、それぞれテキストの前半と後半をなしている。前半のテキストでは、幾重と繁雄という男女の関係が語られ、そこに明らかに見られるのは幾重の不機嫌さである。恋人と思しい二人が料亭で逢うが、幾重は、繁雄に関心がないかのように、彼と顔を見合わせることもせず、ひたすら窓外の雨を見つめる。それまで「可愛らしく思ったりした」(489頁)繁雄のことを、幾重は何故その夜はつまらなく覚え、自分のほうから「心を誘ってやる」(489頁)のも面倒臭く思うのである。繁雄とやりとりをあまり交わさないまま、不機嫌そうに帰ろうとする幾重は、彼と帰り道を歩きながら昔の恋人のことを思い出したりもする。

「不満足さ」¹³、「倦怠の感情」¹⁴とも読まれてきたこの不機嫌さは、これまでの研究では、主人公幾重のセクシュアリティと関連させて解釈されてきた。たとえば、吉川は「女の思を苛立たせるやうな、男の強い肉の魅力などがない」(489頁)という繁雄を形容する語りに注目し、幾重の不機嫌さを繁雄の男性性の欠如に由来するものと解釈し¹⁵、村瀬は幾重を「倦怠させているのは繁雄の受動性」だと述べたうえで、そこから「男の能動／女の受動」という規範的な異性愛関係を欲望する彼女のセクシュアリティを読み取っている¹⁶。こうした幾重の不機嫌さという心情をめぐる解釈を根拠に、先行研究は前半のテキストを異性愛規範が内在する物語として読んでいる¹⁷。

13
同注7

14
同注8

15
同注7

16
同注8

17
同上

しかし、雨音を聴きながら窓外に目を向ける幾重が、「限らない情緒を折り込み」(486頁)、「浮気っぽい春の香気を含んだ」(486頁)雨に触発され、様々な情緒と空想を味わうところから語りはじめられる「春の晩」は、感覚と空想の描写に彩られるテキストである。とくに、前半のテキストにおいて、そうした描写は至る所に散見され、そこに幾重の様々な複雑な情動と欲望が語られているがゆえに、本作を読み解くための重要な語りと思われる。それらの描写に注目すれば、そこに読み取り得る情動と欲望は、いずれも不機嫌さという言葉で片付けることはできない。それどころか、そうした情動と欲望は異性愛の権力構造にすら収まらないようにみえる。

次節では、幾重の感覚世界が描かれる箇所に触れ、そこに見られる情動と欲望を顕在化させることで、男女の恋愛が描かれている前半のテキストを分析し、異性愛制度に対する本作の位相を再検討する。

3. 感覚世界の非異性愛的な攪乱性

テキストにおける感覚の描写に目を向けると、自然風景と感覚の描写が混ざり合い、風景に感応することで新たな情動が生み出される様相が描かれている。本作のみならず、俊子の作品に共通して読み取り得るこのような描写は、従来、俊子の独自の官能的表現、心象風景¹⁸とも読まれてきたが、本作において興味深いのは、風景へ幾重の視線が向けられるとき、彼女の感覚世界に妄想的な瞬間が現れるということである。こうした瞬間は次のように記述されている。

「雨なんかどうでもいいぢやありませんか。」繁雄はつまらなさそうに呟きながら、幾重と同じやうに雨を眺めた。雨はだんだん軽く降つて、門の柳が可愛らしい青い芽をすんなりと静かになびかしてゐた。それが春信のかいた若衆姿のやうに、嫺やかな風情に幾重の眼に映つた。（487-488頁；下線引用者）

視覚を中心に描かれているこの箇所は、雨を浴びている柳が「若衆姿のやうに」、「嫺やか」に目に映る、という幾重の独特な感覚世界を表している。ここで注目に値するのは、門の柳は「若衆姿のやうに」見えるという、柳と若衆姿が比喩的にイメージを重ねられている状態である。こうした状態から、柳を「若衆姿」に置き換える連想が、幾重の感覚世界で働いていることがわかる。かくして、「若衆姿」という連想を引き寄せてくるところに、ある種の〈妄想〉的世界の移行がみられるだろう。その妄想の対象は、柳と重なっている「春信のかいた若衆姿」である。春信が鈴木春信¹⁹のことならば、ここでの若衆姿は江戸時期の浮世絵に登場する若衆と考えられる。

周知の通り、若衆は元服前の前髪姿の美少年をさし、奈良・平安時代に起源をもつ男色という性風俗に結び付けて語られることが多い²⁰。しかし、江戸時期に至ると、若衆にまつわる風俗は大きく変容し、男性だけではなく、独特な美をもつ若衆が女性にも歓迎された²¹。近世文化研究の板坂則子が指摘しているように、江戸時期の女性に「若衆好み」という風俗があり、それが浮世絵に頻繫に描かれている²²。板坂によれば、浮世絵、とくに鈴木春信のそれには、若衆が女性に欲情される絵が多くみられ、そこにおける若衆は、多くの場合、振袖姿に島田結をし、男性でありながら女性たちと似た風貌を持つ「両性具有」の表象だという²³。

また、白倉敬彦が指摘しているように、女装姿の若衆への女の興味には、単に男へと向けられた眼差しとは異質なものがあはずで²⁴、それは自分と似たもの、つまり女性的なものを追い求める自己愛の心情であり、すなわち男と女の関係ではなく、「女対女」の関係という心情的な側面である²⁵。これらの指摘を踏まえれば、妄想的な感覚を走らせた先で、「若衆姿」を楽しむ幾重の情動は、女性が男性へ眼差しを注ぐというような、異性愛的なものではないだろう。その情動は、むしろ前述した江戸女性の「若衆好み」の心情に共通しており、「女

18

山崎真紀子『田村俊子の世界：作品と言説空間の変容』彩流社、307-315、2005年1月

19

江戸中期の浮世絵師。美人画を得意とし、遊里風俗や市井の日常生活の情景に古典和歌の歌意などを通わせた見立絵を好んで制作した。

20

白倉敬彦『江戸の男色：上方・江戸の「売色風俗」の盛衰』洋泉社、21、2005年5月

21

板坂則子『江戸時代恋愛事情：若衆の恋、町娘の恋』朝日新聞出版、256、2017年6月

22

同上、256-257。江戸女性の「若衆好み」について、白倉敬彦・田中優子『江戸女の色と恋：若衆好み』（学習研究社、2003年3月）にも詳しい。

23

同上、248-252。江戸浮世絵における若衆は両性具有の表象であることに關して、佐伯順子「春画の“少年力”：魅惑という権力」（『ユリイカ』47(20)、135-145、2016年1月）にも詳しい。

24

白倉敬彦・田中優子『江戸女の色と恋：若衆好み』学習研究社、41、2003年3月

25

同上97-128

対女』の関係という心情的な側面を有する。このように、幾重の感覚世界と、そこから読み取り得る彼女の欲望のあり様は、男女間の性愛を特権化する異性愛制度に収まらないと指摘できるだろう。

ここでさらにもう一箇所、風景から回想へと流れていく記述と合わせて考えてみたい。前半テキストの終わりに配置されたこの記述では、繁雄と別れる前に、彼と共に帰り道を歩きながら、周囲の光景へ視線を巡らせる幾重が、不意に「十何年も前の初恋人」（486頁）のことを思い浮べる。その男の「若くて美しい」「面長な輪郭」（497頁）と、少女時代に彼の家に遊びに行った情景が彼女の脳裏に甦り、そして回想が次のように続く。

男の夫人がいやな顔をするので、幾重はちょいちょいと其家へ行くこともできなかつた。お互いに、何か好い機会を持たうとする默契を、心の中に秘め合つたままで、長い月日が経つていた。幾重からは男の手許へ手紙を送ることもできなかつた。（中略）唯、顔を合はせるだけでもいいから、一と月一度に、二た月に一度でも日を定めて逢つてみたい——幾重は然う思詰めたりすることもあつた。けれども、あの男へは、そんな嬰兒染みたことは云つてやれなかつた。思ひ忍ぶと云ふ事に、無限の恋の律が波打つてゐるやうに、いつも詩味深く思ひやられるのは、この男との陰のやうな愛情ばかりであつた。幾重は、何うかすると、その男への恋が、自分一生の間のほんたうの恋であつたやうに思ひ返されたりした。

幾重は一人で、楽しい空想に耽りながら、うかうかと歩いて行つた。（498頁）

この箇所について、村瀬士朗は、幾重の望む性のあり様は「男の能動／女の受動」という構図であり、男性の欲望の対象になることであると読み取っている²⁶。しかし、記憶が浮かび上がるときの幾重の情動に目を向ければ、彼女の欲望のありようは「男の能動／女の受動」²⁷という構図に回収できない。引用の示すように、ここで肝要なのは、幾重が思い返す初恋人との関係は、叶わない恋であり、いわば欲望の成就が永続的に遅延され、宙吊りになっている状態ということである。とすると、成就が永続的に遅延されている欲望を、「詩味深く」喚起する幾重の情動は、マゾヒズム的感覚として理解できる。

なぜなら、サディズムと対比しながら、マゾヒズムの論理を語るジル・ドゥルーズが指摘するように、マゾヒズムは「期待」と「宙吊り」の作用によるものであるからだ²⁸。ドゥルーズによれば、マゾヒストは快楽を根本的に遅延する何ものかとして待ち続け、待たれている快楽の到来を否認し、否認のしぐさによって宙吊りにして、その状態のなかで快楽＝苦痛の複合を体験するという²⁹。この指摘を踏まえて、成就できない恋を思い返す幾重の情動は、期待と宙吊りという体験を繰り返して再演し、そこから快楽を覚えるという、マゾヒズム的なものと考えられるだろう。

一方、日合あかねが指摘しているように、女性によるマゾヒズム的实践は、

26
同注8

27
同注8

28
ジル・ドゥルーズ『マゾッホとサド』運
實重彦訳、晶文社、96、1998年10月

29
同上89-102頁

一見受動的なようだが、実際に能動性を能動的に放棄するという逆説的な行為を、パフォーマンスに遂行するがゆえに、セクシュアリティにおける既存の権力関係を脱構築し、性的主体化に導きうる可能性を有する³⁰。「思ひ忍ぶ」という受動的な状態を、「楽しい空想」として能動的に喚起する幾重のマゾヒズム的感覚は、能動／受動、欲望の主体／客体といった異性愛の権力構造を攪乱するものであろう。この空想が「楽しい」と形容されているように、それが浮かび上がる瞬間に、「思ひ忍ぶ」ということから快楽を覚える欲望の主体が出現するのである。

以上のように、従来異性愛的に読まれてきた前半のテキストには、異性愛規範で整理しきれない攪乱的な要素の存在が確認される。それゆえ、本作は異性愛の権力構造を補完するのではなく、異性愛規範を攪乱する側面を有しているといえるのではないか。そうした本作の攪乱性に留意しつつ、続いて女性同性愛が描かれている場面を分析してみる。

4. 女性同性愛への同時代文壇のまなざし

後半のテキストにおいて、繁雄と別れた幾重は、画家の女友達京子を訪ねる。自室に京子はいなかったが、画具が乱雑に散らかっている机に置いてある、「The irresistible Argument」(508頁)と題する春画集が幾重の注意を引く。画集を一枚ずつ繰って観た後、幾重は二階の部屋へ上がり、座敷の隅に、原という男性友達の隣に乱れた姿でうずくまっている京子を目撃する。その男性がそそくさと去った後、幾重は京子を「自分の膝の前に引き据え」(508頁)、彼女の「小さい身体」(508頁)を抱きしめる。その時幾重は「京子を抱いてゐる自分が、まるで愛の絶頂にあるやうな気がし」(509頁)で、「その迷蒙な慾のなかに酔ひしれてゆくもの々状態を、ひそかに見守ることのできる畸形な快楽を、幾重はうつとりと夢みてゐた」(509頁)という。

レズビアン・ラブが描かれている場面において、女性間のエロスが「慾」と「快楽」(509頁)といった表現によって可視化されるように、本作における女性同性愛表象の重要な特徴は、女性同性愛が性愛化される形で明示的に語られているという点にある。このような女性同性愛の描かれ方について、長谷川啓はそれを異性愛絶対主義への抵抗と見なしている³¹。一方、対照的な読みもある。吉川豊子は、上記の引用における、幾重の性的欲望が「畸形な快楽」(509頁)と名付けられた箇所に注目を払い、それをセクソロジーが内面化された語りとして読んでいる³²。しかし、女性同性愛をめぐる同時代的状況を視野に入れるなら、本作における女性同性愛表象の位相は、排除か抵抗かという二項対立のどちらか一方には還元できないと思われる。ここでまずは、女性同性愛を書くことが、当時の文壇でどのような視線に晒されるのかを明らかにしてみたい。

本稿の冒頭でも言及したように、恋人がいながら女性とも付き合う本作の

30

日合あかね「女性の性的自立におけるマゾヒズム的行為体の可能性」『フォーラム現代社会学』4(0)、96-107、2005年

31

同注10

32

同注6

主人公は、当時「病的」な「性欲倒錯」した人間と評されている³³。だが、この同時代評に見られるまなざしは、女性同性愛をタブー視するような単純なものではない。

33
同注5

田村俊子の「春の晩」(新潮)は幾重といふ感覚の病的にシャルフな女の性欲倒錯を描いたものであるが、その倒錯の点が十分に描き盡されて居ない。幾重が京子と原といふ男との関係を目撃した刹那に、原といふ男に対して、恰も同性に対するが如き病的に激烈な嫉妬が突発す可き筈であるが、此の作では、その刹那の描写も、それ以後京子の家から帰るまでの描写も頗る不完全である。しかし、前半、幾重が繁雄に対する性欲倒錯のジムプトウメ³⁴は、ある程度まで、よく描出されて居る。殊に此の作者の特技であるアブノルマルなエムフインドウング³⁵の戯曲弄は随分と思はれる程誇張して表はしてある。此の作は今月の創作中では優秀の部に属する。³⁶

34
Symptome(ドイツ語)、徴候、引用者注

35
Empfindung(ドイツ語)、感情、引用者注

36
同注5

同時代評に目をむけると、本作の主人公が「性欲倒錯者」と認識されているように、セクソロジーの知が同時代文壇へ広まり出す様相がうかがえる。だがこの評論にはある種の転倒した事態がみられる。評者は「性欲倒錯」を読み込みながらも、本作を「優秀の部に属する」ものと評価している。このような事態から、同性愛をタブー視するまなざしとは異なる視線がみられるだろう。「性欲倒錯のジムプトウメは、ある程度まで、よく描出されて居る」と評されているように、それは異常への猟奇的な関心に支えられた、女性同性愛への覗き見的な視線である。また、こうした視線は単なる覗き見にとどまらず、セクソロジーの知を取り入れて文学を批評する眼差しともなっている。「その倒錯の点が十分に描き盡されて居ない」という評価が示すように、「倒錯者」の異常性をはっきりと描きだすことが要請されている。

このような女性同性愛への視線は、特殊なものではなく、女性同性愛を描く同時代のほかの作品の評論にも確認でき、同時代文壇に共有されていたと思われる。例えば、「春の晩」の翌年に発表された田山花袋「大河のほとり」³⁷という劇曲がある。この劇曲は愛し合う女学生二人がある海岸で心中するという物語を描いているが、当時の文壇で酷評された。同時代評は以下のようである。

37
田山花袋「大河のほとり」『中央公論』
1915年1月

次に田山花袋氏の初めての脚本「大河のほとり」は、二人の女が心中すると云ふので同性の愛を取扱つたものなのであろうけれ共、どうも首肯し難い個所が多い。(中略)果してその狙所が女性同志の同性の愛と云つた変態心理を描き得てゐるか云ふに決してそれが無いのである。かう言へば作者はもつと眼鏡を沢山掛けて観察思考しないからだ云ふかもしれない。³⁸(下線引用者)

38
内田魯庵「新年の雑誌から(三)」『読売新聞』1915年1月12日

同性の恋で死んだ二人の女学生の心理の解剖などは不徹底極まつたものである。此の劇曲の材料の事実調べをする必要はないが(此の劇曲は事実に依つたか否か不明故)僕の聞いた、或北国の海岸で同性の情死をした

二人の女学生の関係は、もつと汚く、もつと肉的で従つてもつと複雑で深刻らしかった。(中略)この話は勿論「大河のほとり」の材料とは何の関係も無いであらう。けれども、作者の眼は死骸を検案した外科医のメスであつた。³⁹(下線引用者)

前掲した「春の晩」の同時代評と同じく、「大河のほとり」についての評論では、作品が酷評されるものの、同性愛を描くこと自体は批判的になっておらず、「変態心理」が十分に描かれていないことが非難されているのである。その描写の不十分さはさらに作者の同性愛に関する知の欠如に還元されている。

女性同性愛をタブー視するのではなく、むしろそれを作品で取り扱うのを容認し、同性愛という現象をありのまま描くことを奨励するという同時代文壇のまなざしを考慮に入ると、女性同士の欲望をあからさまに表現し、また「畸形な快楽」(509頁)として語るとは、異性愛機構への抵抗になっておらず、むしろ同時代文壇のまなざしと一種の応答関係になることで、却って安全な物語になっているといえよう。しかしながら、俊子が同時代文壇の視線とそれを支えるセクソロジーの知を内面化し、好奇心をそそる他者として女性同性愛を表象したと結論づけるのはまだ早い。当時の女性同性愛言説に着目すれば、本作における表象と、セクソロジーに依拠し同時代に流布していた「同性愛」カテゴリーとの間に興味深いズレを見せているからだ。

5 「先天的倒錯」カテゴリーの脱構築

1911(明治44)年、新潟で女学校卒業生同士による入水心中事件が起こった。同事件はメディアに「極端な同性の愛」として報じられ、女学生間の親密性が注目され、女性同性愛が「発見」されたきっかけとして位置付けられている⁴⁰。赤枝香奈子によると、新潟事件をきっかけに、女性の同性愛を二つに分類する認識枠組が現れるという⁴¹。前者は「病的友愛」と称される精神的なもので、後者は「病的肉欲」と呼ばれる性欲が介在する関係である。こうした認識枠組は、さらに1890年代から徐々に翻訳を通して導入されたセクソロジーの図式で解釈され、「病的友愛」が後天的な仮性な同性愛、「病的肉欲」が先天的な真性なものとして見なされてきた⁴²。

なかでも、「先天的女性同性愛」(病的肉欲)というカテゴリーは、いわば女性同性愛の病理化、「種族化」⁴³であり、それを維持し支えていたのは、1910年代日本のセクソロジーの重要な特徴である、性欲を個人の内なる本能、所与のものとして考える存在論的な性欲観である⁴⁴。そして、こうした女性同性愛認識は、大正時期に流布し、俊子のまわりの女性知識人にまで広まった様相を見ている。

たとえば、「日本のフェミニズムの嚆矢」⁴⁵といわれ、俊子も創刊号から社員

39

中村星湖「月評始め(三)」『時事新報』
1915年1月15日

40

同注3

41

赤枝香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版、103、2011年3月

42

このような認識枠組を援用した女性同性愛言説としては、「同性の愛(社説)」(『婦女新聞』1911年8月11日)、「同性の愛に就て」(『婦女新聞』1911年9月8日)、「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」(『新公論』1911年9月)などが挙げられる。

43

ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ 知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、47-66、1986年9月

44

古川誠「恋愛と性欲の第三帝国：通俗的性欲学の時代」『現代思想』21(7)、110-127、1993年7月

45

同注37、44頁

として参加した⁴⁶『青鞥』という雑誌がある。「春の晩」が発表された1914年、同誌4月号に、性科学者ハヴロック・エリスの著作「女性間の同性恋愛」⁴⁷の翻訳が掲載された。上記の「女性の同性愛は二種類ある」という認識枠組を主張し、「先天的女性同性愛」を「性の転倒した女」⁴⁸と説明しているこの翻訳は、『青鞥』に初めて載せられた同性愛に関するセクソロジー著作である。その掲載はセクソロジーの知が『青鞥』の女性知識人に広まりはじめる様相の一端を示しているが、ここでさらに注目したいのは、『青鞥』主宰者平塚らいてうが綴ったこの翻訳の序文である。

女学校の寄宿舎などで同性恋愛といふやうなことが行はれるやうなことを屢々耳にはいたしますけれど、(中略)全く何の興味もこの問題にもつことが出来ませんでした。ところが私の近い過去に於て出会つた一婦人——殆ど先天的倒錯者とも思はれるやうな一婦人によつて私はこの問題に非常な興味をもつやうになりました。私はその婦人の愛の対象として大凡一年を過ごしました。そして色々のことを考へさせられました結果、いよいよこの問題について、知りたくなりました。で、性的生活を常に研究する小倉清三郎に何か同性恋愛のことを書いた書物がないでせうかと御尋ねしたことがありました。(中略)その中にエリスのStudies in Psychology of Sexの中のSexual Inversionといふのがありました。⁴⁹(下線引用者)

「女性間の同性恋愛」の序文では、らいてうは女性同性愛の問題に関心を持ち、エリス「女性間の同性恋愛」を『青鞥』に載せた理由として、ある「婦人の愛の対象として大凡一年を過ごし」という、自身の〈同性愛的〉体験⁵⁰を記している。ここで注目すべきは、らいてうは自身の体験を説明する際に、「先天的倒錯者」という用語を使用しているということである。「先天的倒錯者」という用語は、前述した「先天的女性同性愛」というカテゴリーに相当するものであり、エリスのセクソロジーに依拠していると思われる。このように、セクソロジーの著作を誌上に載せ、さらにその用語を用いて自身の体験を説明するということは、女性同性愛をめぐるセクソロジー的言説が増殖し、俊子のまわりの女性知識人に広まり、受容された様相を物語っている。

さて、「春の晩」に戻ると、「迷蒙な欲」「畸形な快樂」(509頁)という女性同性愛の語られ方は、確かに以上のような女性同性愛をめぐる同時代言説を想起させるだろう。しかし、後半のテキストにおける身体感覚の描写に注意を払って読めば、京子への幾重の性的欲望は、内なる本能、または彼女の個人的な素質と関係する何かとして描かれているのではない。彼女の欲望は、身体感覚を通して、外界の何かに触発されるものとして表象されているようにみえる。

まず、繁雄と離れてから京子のところに向かうまでの、幾重の感覚世界についての描写に注目したい。先述したように、本作では異性愛と同性愛という二つの場面が、それぞれテキストの前半と後半に配置されている。だが、二つの場面は連続的に描かれているわけではない。幾重は繁雄と離れた後に、「京子

46 堀場清子「付・青鞥参加者名簿」、『青鞥の時代』岩波書店、1-5、1988年3月

47 エリス「女性間の同性恋愛」、野母訳、『青鞥』4巻4号、1914年4月。この翻訳はイギリスの医師・性科学者ヴロック・エリスの著作*Studies in the Psychology of Sex* (1900)の第一章*Sexual Inversion*を訳したものである。

48 同上

49 同上

50 黒澤亜理子の考察によれば、らいてうが述べているこの〈同性愛的〉経験とは、1912年から1913年にかけての、青鞥社社員尾竹紅吉との交際とである。(黒澤亜理子「一九一二年のらいてうと紅吉：『女性解放』とレスビアニズムをめぐる」西田勝退任・退職記念文集編集委員会編『文学・社会へ地球へ』三一書房、309-327、1996年9月)

に逢ひたいと云ふ興味がなくなつてしまつたので」(500頁)、京子を直ちに訪ねようとせずに、「しばらく道の中で思ひ惑ひながら」(501頁)夜道を徘徊する。二つの場面に挟まれているこの遊歩のシーンでは、「寂しい思ひをして歩」(501頁)く幾重は、「踊りの師匠の家」(500頁)からの「可愛い足音」や「三味線の低い調子」(500頁)を聞いたり、「待合の軒並に並んでる綺麗な町」(500頁)で半玉たちの「真つ白な足袋恰好」(500頁)などを見送ったりするように、移動する場所で風景や物事に反応していき、感受性が刺激される。このように徘徊したあげく、彼女は「板の端を渡し」(502頁)、京子の邸のあるところへ向かうと描かれているように、遊歩という身体感覚を通してめぐり合う外界——「綺麗な町」や「半玉たち」の姿など——に触発されることによって、一旦冷めてしまった京子への欲望が再び喚起されるのである。

つづく京子とのレズビアン・ラブが描かれている場面でも、欲望が外界に掻き立てられる語りが繰り返されている。この場面では、原という京子の男友達が立ち去ったのちに、幾重が京子にいる一階の部屋へ戻り、そこでの二人の交渉が次のように描かれている。

「The irresistible Argument」

幾重は京子の顔を見ると、かう云つて笑つた。さうして京子の手を取つて、自分の膝の前に引き据えた。仆れるやうに凭れかかつた京子の身体を、幾重は力いっぱい抱きしめて、その崩れた髪の毛に頬を押し付けた。

(中略)

幾重はどんなにでも京子を可愛がらうと思つて身が燃える。さうして、そのirresistibleな恐ろしい力に引きずられて、その迷蒙な慾のなかに酔ひしれてゆくものの状態を、ひそかに見守ることのできる畸形な快楽を、幾重はうつとりと夢みてゐた。(508-509頁)

この箇所の前に描かれている、幾重が一階の部屋で京子を待つシーンを参照すると、ここでのirresistibleという形容は、幾重が京子を待っている間に、一枚ずつ繰って観た、一階の部屋の机の上に置いてある「The irresistible Argument」という春画集に引き出されたものといえる。幾重の京子に対するホモエロティックな欲望は、幾重の身体の内から湧いてくるものではない。「The irresistible Argument」と題された春画と、「そのirresistibleな恐ろしい力」に「引きずられ」、触発されるものとして描かれているのである。つまり、彼女の欲望は、個人の内なるものとその発露ではなく、〈個〉の自律性を攪乱させる、偶発的で流動的な快楽として描かれている。

さらにいえば、「綺麗な街」(500頁)である花街、半玉の姿そして春画という欲望を喚起するものは、いずれも文化的に作られた性風俗に関する物事である。京子への欲望は、それらの物事が作りあげた性的幻想に刺戟され、その幻想に見られる欲望を模倣＝反復することによって再生産されるものと考えられた。そうだとすれば、ホモエロティックな欲望は、セクソロジーが構築した

「先天的倒錯」という同性愛カテゴリーに回収できない、文化的に構築される起源なき模倣として表象されているともいえるだろう。

このように、このテキストは、同時代の女性同性愛認識による「畸形」という概念を取り入れ、同時代文壇の視線への応答を仮装しながら、そうした同性愛認識の根幹である存在論的な性欲観を脱中心化している。それゆえ、本作における女性同性愛表象は、排除／抵抗という二項対立の評価軸で読むことができない、攪乱的なものといえる。

以上、同時代言説との関わりから、「春の晩」における女性同性愛表象を考察した。ここでさらに、同時代に発表された女性同性愛小説に目を向け、それらの文学に対する本作の位相を確認したい。浅野正道は1910年代『青鞥』に発表されたレズビアン小説群を分析し、その小説群には一種の共通点があると指摘している⁵¹。浅野によれば、それらの小説は「強制的異性愛の機構と共犯し」、「同性愛を現実で不可能なものとして、断念すべきもの」として表象している。またこうした「やがて終わるべき」ものという女性同性愛表象の紋切り型は、その後の吉屋信子などの少女小説にも共有されているという⁵²。

それに対して、本作における女性同性愛は「終わるべきもの」⁵³として表象されてはいない。終盤では京子の郎を出、帰ろうとする幾重は、京子とともに駅までの道を歩く途中、「電車が通らないわ」(510頁)と気付き、そして二人が夜道で「暗い隅のなかに輝いてゐた」(510頁)灯光を眺めるところで小説は終わる。その夜に二人が別れずにいることを裏づけるというこの結末は、二人の関係は物語の終了後にも終わらずに持続することを示唆しているのではなかろうか。その意味で、本作は女性同性愛を呪縛から脱出させ、その表象の新しい可能性を提示する戦略的なテキストと思われる。

51

浅野正道「やがて終わるべき同性愛と田村俊子:『あきらめ』を中心に」『日本近代文学』65、163-178、2001年10月

52

同上

53

同上

6 おわりに

本稿では、バイセクシュアルの女性を主人公に据え、女性同性愛をあからさまに描きだしている田村俊子「春の晩」のセクシュアリティ表象を分析し、異性愛制度に対する本作の位相、および女性同性愛表象と同時代言説との力学という二点を考察した。

バイセクシュアリティを表象している本作において、異性愛の恋愛は紙幅を割いて語られており、女性同性愛は「迷蒙の慾」、「畸形な快楽」(509頁)と名付けられているゆえに、従来の研究では、異性愛主義の権力構造を補完する側面をもつ作品⁵⁴と指摘されている。しかし、テキストに散見される感覚描写に注目して読むと、脱異性愛的な情動と欲望を、感覚描写のレベルで描く本作は、異性愛主義に補完するのではなく、むしろ異性愛規範を攪乱する側面を有している。

さらに、本作の女性同性愛表象について、それが明示的で官能的に描かれて

54

同注8

いるものの、「畸形」といった同性愛を病理化する言葉で名づけられている。そのため、異性愛絶対主義への抵抗という評価⁵⁵がある一方、同性愛を病理化するセクソロジー言説を再生産するという指摘⁵⁶もある。たしかに、「畸形」として描かれる女性同性愛は、一見同性愛を病理化する言説を反復し、同時代文壇の覗き目の眼差しに回収されやすい形で形象されている。しかし、本作における同性愛の描かれ方と同時代のセクソロジー言説とのズレから確認できたように、「畸形」という名づけは、同時代文壇の眼差しへの応答を〈仮装〉することで、女性同性愛を語る場を確保するための戦略と思われる。ホモセクシュアリティを個人の素質ではなく、流動的な起源なき模倣として表象することで、本作は同時代文壇の期待の地平を裏切り、同性愛の「先天的倒錯」カテゴリーを脱構築し、同時代に規範化された性欲観を攪乱している。

同性愛に関するセクソロジーの知が広まり、女性のセクシュアリティへの監視が一層厳しくなった時代に、女性同性愛は多くの場合、現実で不可能な終わるべきものとしてしか表象されていない⁵⁷。しかし、それらの表象とは異なり、本作は攪乱的な表象を描き、女性同性愛の永続性を象徴的な結末で語っている。それゆえ、女性同性愛表象の新しい可能性を拓いたテキストとして、評価すべきではなかろうか。

55
同注10

56
同注7

57
同注51